



[評者]

清田 雅智

飯塚病院総合診療科

ジェネラリストと学ぶ 総合画像診断 臨床に生かす!画像の読み方・考え方

上田 剛士 監修

吉川 聡司 執筆

●B5 頁240 2022年10月

定価: 4,400 円 (本体 4,000 円+税 10%)

[ISBN978-4-260-04964-1] 医学書院刊



画像診断は、現代の医療にとってますます重要な位置にいることは論をまたないであろう。ラエネックに象徴される19世紀の医師は、身体診察をていねいにとり、死後の解剖所見との対比により疾病をどのように生前に診断するかということを極めようとしていた。20世紀に入ると、臨床検査部の整備とともに生体の物質の変化を化学的に検証することで診断をより正確にしようとした。そして1980年代から診療現場に登場するCTやMRIは、身体診察や臨床検査では捉えられなかった、体の深部に起こる解剖学的変化を捉えるという画期的な技術により生前に病気を可視化した。どれも診断に欠かせない要素であろう。

一方、画像診断はこれほど臨床現場で重要とされている割に、どれほどの医師が専門的な読影トレーニングをしているのだろうか。医学部の授業ではカバーできるはずのない画像診断の深い世界は、現場では放射線科医の読影レポートと対比することでしかフィードバックされないはずだ。しかも多くの研修医はレポートだけで、オリジナルの画像を読まないのではないかと。私は2年次から3年次にかけて9カ月間の放射線科ローテーションを志願し、20年以上も自分でオリジナルの画像を自身で仮診断し、放射線科医のレポートと対比しながら自分の読影スキルを磨いてきた。これがいかに病態の理解に役立ったかということは身に染みて感じており、すべての研修医が放射線科を研修すべきではないかという自説さえもっているが、昨今の研修の選択の自由度のなさからは無理な話である。

本書は、こういった現状を変えることができる画期的な本ではないだろうか。現場で内科医として働く視点(画像だけでは見えない変化は、やはり病歴聴取と身体診察という古典的な技能が未だに必要なのです!)をもち、さらに放射線科医としての両方の視点をもつ医師はそう多くない。こういう医師について学ぶことを可能とするのが本書の特徴である。

画像を通して解剖学的変化を追ひ、病態を理解すること。CTやMRIをkey imageではなく全体を眺めるなかで病変を発見するというトレーニングが可能です。昔は画像をフィルムで見て重要なものは自前の接写ができるデジタルカメラで保存するということをしていました。今や時代はフィルムレス。故にYouTubeの動画を通じて膨大なスライス情報を読むことができます。携帯でダウンロードするより(携帯でみるのは、画面の小ささとスピードの早さについて行けませんでしたが)、自身のPCで再読み込みして、再生速度を0.25倍にし、さらに時々動画を一時停止してkey imageの付近を丹念に見直すことをすると実際の読影と同じことができるように工夫されています。これは通常の本ではできない、画期的な仕組みでした!

各症例では読むべき参考文献も付いているので、まさに放射線科のローテーションと同じ教育ができる環境にあります。“Dähnert”や“Paul and Juhl”にもない、時代を先取りした内容になっています。私は類書を知らず、この本を強くお勧めいたします。